

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果		
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害のおそれ)	症状の悪化 につながるおそれ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使用 環境の変化		
		併用禁忌(他 剤との併用によ り重大な問題 が発生するお それ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ		
抗ヒスタミン成分	塩酸ジフェニルピラリン 注	抗ヒスタミン作用及び抗アセチルコリン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・モノアミン酸化酵素阻害剤(相互に作用を增強)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眼気、頭痛)、頻度不明(排尿困難、めまい、けん怠感、神経過敏、口渇、悪心・嘔吐、下痢、便秘、喀痰喀出困難)、自動車の運転等危険を伴う機械の操作	頻度不明(過敏症)					通常成人1回1~2管(塩酸ジフェニルピラリンとして2~4mg)を1日1~2回皮下又は筋肉内注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、小児ストロフルス、薬疹、中毒疹)、じん麻疹、アレルギー性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽
	α-マレイン酸クロルフェニラミン	抗ヒスタミン作用		中枢神経抑制剤・アルコール・MAO阻害剤・抗コリン作用を有する薬剤(相互に作用を增強)、ドロキシドパ、ノルエピネフリン(血圧の異常上昇)	ショック(頻度不明)	5%以上又は頻度不明(鎮静、神経過敏、頭痛、乾燥感、複視、眼気、不眠、めまい、耳鳴、前庭障害、多幸症、情緒不安、ヒステリー、振戦、神経炎、協調異常、感覚異常、霧視、口渇、陶やけ、食欲不振、悪心・嘔吐、腹痛、便秘、下痢、頻尿、排尿困難、尿閉等低血圧、心悸亢進、頻脈、期外収縮、鼻及び気道の乾燥、気管分泌液の粘性化、喘鳴、鼻閉、溶血性貧血、肝機能障害(AST(GOT)・ALT(GPT)・AI-Pの上昇等)、悪寒、発汗異常、疲労感、胸痛、月経異常、0.1%未満(血小板減少)、眼気を	5%以上又は頻度不明(過敏症)					α-マレイン酸クロルフェニラミンとして、通常、成人には1回2mgを1日1~4回経口投与する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	じん麻疹、血管運動性浮腫、枯草熱、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症、薬疹)、アレルギー性鼻炎、血管運動性鼻炎、感冒等上気道炎に伴うしゃみ・鼻汁・咳嗽。

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果							
評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		薬理に基づき 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそれ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	用法用量	効能効果		
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの						薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	使用量に上 限があるもの				過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被害 のおそれ
抗ヒスタミン成分	メキタジン	ゼスラン錠	ケミカルメディエーター拮抗作用、抗ヒスタミン作用、抗アレルギー作用	中枢神経抑制剤・アルコール(眠気)、抗うつ剤・MAO阻害剤・アトロピン様作用を有する薬剤(口渇、排尿困難)、メキシサレン(光線過敏症)	肝機能障害・黄疸・血小板減少(頻度不明)	ショック、アナフィラキシー様症状(頻度不明)	0.1~5%未満(眠気、けん怠感、ふらふら感、口渇、胃部不快感)、0.1%未満(AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇、血小板減少、頭痛、めまい、下痢、便秘、食欲不振、嘔吐、胃痛、腹痛、胸部苦悶感、心悸亢進、排尿困難、咽頭痛、浮腫、顔面潮紅、視調節障害、月経異常、味覚異常、口内しびれ感)、頻度不明(黄疸)、自動車の運転等危険を伴う機種の操作。	0.1%未満(過敏症)									1.通常成人1回メキタジンとして6mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。 2.通常成人1回メキタジンとして3mgを1日2回経口投与する。なお、年齢、症状に応じて適宜増減する。	1.気管支喘息、2.アレルギー性鼻炎、じん麻疹、皮膚疾患に伴うそう痒(湿疹・皮膚炎、皮膚そう痒症)
血管収縮成分	塩酸ブソイドエフェドリン	なし																

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果		
		薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ 等に伴う使 用環境の変 化	
評価の視点			併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの					使用量に上 限があるもの	適量使用・誤 使用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ			
血管収縮成分	塩酸フェニレ フリン	ネオンネン ニューワ注1 号	塩酸フェニレ フリンは選択 的α ₁ 刺激薬 である。	MAO阻害剤(MAO阻害薬で 治療中又は治療後3週間以 内の患者・血圧の異常上 昇)、三環系抗うつ剤・分娩 促進剤(本剤の作用が増強)			0.1~5%末 滴(胸内苦 悶、呼吸困 難、頭痛、悪 心・嘔吐、手 足のしびれ 感、手足のふ るえ感、紅 疹)、頻度不 明(心悸亢 進、徐脈、血 圧異常上昇、 発汗)	頻度不明(過 敏症)		原則禁忌:心室性 頻拍(症状を悪 化)・本剤の成分過 敏症の既往歴	高血圧、重篤な動 脈硬化症、甲状腺 機能亢進症、高齢 者、心疾患、徐脈、 妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人、低出生体重 児、新生児、乳児、 幼児又は小児			過量投与 徴候・症状:心 室性期外収縮、 一過性の心室性 頻拍、頭重感、 手足の疼痛、脳 出血、頭痛、肺 水腫等の症状が あらわれる。			[皮下注射及び筋肉内注 射] 通常成人1回2~5mg を皮下注射又は筋肉内注 射する。なお、年齢、症状 により適宜増減するが、そ の範囲は1~10mgとし、初 回量は5mgを超えないこ と。また、反復投与を行う 場合には、10~15分おき に行うこと。 [静脈内注射] 通常成人1 回0.2mgを注射液そのま ま、又は約10mLの生理食 塩液、リンゲル液、若しく は5%ブドウ糖液等に混入 して静脈内注射する。な お、年齢、症状により適宜 増減するが、その範囲は 0.1~0.5mgとする。また反 復投与を行う場合には10 ~15分おきに行うこと。 [点滴静脈内注射] 100mL の血液、リンゲル液又は 5%ブドウ糖液等に対し、0.5 ~1.0mgの割合で混入し、 血圧を測定しながら滴数 を加減して点滴静注する。 [局麻時の作用延長] 通 常、20mLの局所麻酔剤に 対して1mgの割合で混入し て使用する。 高齢者減量	各種疾患若しく は状態に伴う 急性低血圧又は ショック時の 補助治療、発 作性上室頻 拍、局所麻酔 時の作用延長

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ	D 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	E 薬理に基づく 習慣性	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	I スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果			
		薬理作用	相互作用										重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性
副交感神経遮断成分	ベラドンナ総アルカロイド	硫酸アトロピン	ムスカリン性アセチルコリン受容体に対する競合的遮断薬	抗コリン作用を有する製剤(三環系抗うつ剤・フェノチアジン系薬剤・イソニアジド・抗ヒスタミン剤等を経口用剤として用いる場合)[相対的に抗コリン作用増強]、MAO阻害剤(経口用剤として用いる場合)[抗コリン作用増強]、強心配糖体製剤(経口用剤として用いる場合)[強心配糖体製剤の毒性を増強]、眼科用剤:三環系抗うつ剤、フェノチアジン系薬剤、抗ヒスタミン剤(本剤の作用増強)	経口剤:頻度不明(眩暈、視調節障害、緑内障、口渇、悪心・嘔吐、眩下障害、便秘、排尿障害、頭痛、頭重感、記憶障害、心悸亢進、呼吸障害、顔面潮紅)、眼科用剤:頻度不明(続発性緑内障、眼圧上昇、血圧上昇、心悸亢進、幻覚、痙攣、悪心・嘔吐、口渇、便秘、顔面潮紅、頭痛、発熱)、視調節障害・麻痺、散瞳のため自動車の運転等危険を伴う機械的操作	経口剤:頻度不明(過敏症)、眼科用剤:頻度不明(アレルギー性結膜炎、眼瞼結膜炎)	線内障(病状の悪化)、前立腺肥大による排尿障害(症状の悪化)、麻痺性イレウス(症状の悪化)、本剤に対し過敏症の既往歴、眼科用剤:線内障および狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の素因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	前立腺肥大、うつ血性心不全、重篤な心疾患、潰瘍性大腸炎、甲状腺機能亢進症、高温環境、高齢者、妊婦、授乳婦、小児・乳児(眼科用剤では全身副作用が起こりやすい)					(眼科用剤)長期にわたり散瞳していると虹彩が癒着	経口剤:硫酸アトロピンとして、通常、成人1日1.5mgを3回に分けて経口投与、非薬物性バークソンニズムの場合には、硫酸アトロピンとして、通常、成人最初1日0.5~1mgを3回に分けて経口投与し、以後漸次増量。 眼科用剤:硫酸アトロピンとして、通常、0.5~1%液を1日1~3回、1回1~2滴ずつ点眼	経口用剤:胃・十二指腸潰瘍における分泌ならびに運動亢進、胃腸の痙攣性疼痛、痙攣性便秘、胆管・尿管の痙攣、有機リン系殺虫剤・副交感神経興奮剤の中毒、迷走神経性徐脈及び迷走神経性房室伝導障害、夜尿症、その他の徐脈及び房室伝導障害、非薬物性バークソンニズム、麻酔前投薬 眼科用剤:診断または治療を目的とする散瞳と調節麻痺
消炎酵素成分	還元リゾチーム	レフトーゼ錠	抗炎症作用:癒痕形成・組織修復作用:濃粘液の分解と排出作用:出血抑制作用	ショック、アナフィラキシー様症状・SJ症候群・Lyell症候群(頻度不明)	0.1~5%未満(下痢、胃部不快感、悪心・嘔吐、食欲不振)、0.1%未満(口内炎等)、頻度不明(肝機能障害(AST(GOT)、ALT(GPT)、Al-P、γ-GTP、LDHの上昇等、めまい)	0.1%未満(過敏症)	本剤の成分過敏症の既往歴、卵白アレルギー(アナフィラキシー・ショックを含む過敏症状)	アトピー性皮膚炎、気管支喘息、薬剤アレルギー、食物アレルギー等のアレルギー性素因、両親、兄弟等がアレルギー症状の既往歴、高齢者				作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかでない点が多いので、漫然と投与しない。	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、60~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。2.歯槽膿漏(炎症型)腫脹の緩解の場合、通常、成人は1日塩化リゾチームとして、180~270mg(力価)を3回に分けて経口投与する。高齢者減量	1.慢性副鼻腔炎の腫脹の緩解、痰の切れが悪く、喀出回数が多い気管支炎、気管支拡張症の喀痰喀出困難、小手術時の術中術後出血(歯科、泌尿器科領域)の場合、2.歯槽膿漏(炎症型)腫脹の緩解の場合	

鼻炎用内服薬

製品群No. 69

ワークシートNo.42

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 薬用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)			スイッチ化等に伴う使用環境の変化		
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの						使用量に上限があるもの	適量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
消炎 酵素成分	セラベプターゼ	ダーゼン5mg錠	・抗腫脹作用 ・喀痰・膿汁の融解・排泄促進作用		抗凝血剤(抗凝血剤の作用が増強)	間質性肺炎、PIE症候群、AST(GOT)、ALT(GPT)の上昇等を伴う肝機能障害、黄疸(0.1%未満)	皮膚粘膜炎、眼症候群(Stevens-Johnson症候群)及び中毒性表皮壊死症(Lyell症候群)、ショック、アナフィラキシー様症状(0.1%未満)	0.1~5%未満(食欲不振、悪心、嘔吐)、0.1%未満(下痢、鼻出血、血痰等の出血傾向)	0.1~5%未満(過敏症)		本剤の成分過敏症の既往歴	薬物過敏症の既往歴、血液凝固異常、重篤な肝障害又は腎障害					作用機序は解明されていない点も多く、用量・効果の関係も必ずしも明らかになっていないので、漫然と投与しない。	セラベプターゼとして、通常成人1日15~30mgを1日3回に分けて毎食後に経口投与する。なお、年齢・症状に応じて適宜増減する。製剤剤の通常成人用法・用量は次のとおりである。 ◇ダーゼン5mg錠:1回1~2錠宛、1日3回毎食後に経口投与 ◇ダーゼン10mg錠:1回1錠宛、1日3回毎食後に経口投与 ◇ダーゼン顆粒1%:1回0.5~1g宛、1日3回毎食後に経口投与 本剤の体内での作用機序はなお解明されていない点も多く、また、用量・効果の関係も必ずしも明らかになっていない。従って漫然と投与すべきでない。	・手術後及び外傷後、慢性副鼻腔炎、乳汁うっ滞(乳房マッサージ及び搾乳を行っている場合)の症状の腫脹の緩解 ・気管支炎、肺結核、気管支喘息時の喀痰 ・麻酔後の喀痰排出困難
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	点眼のみなので、グリチルリチン酸モノアンモニウム、グリチロン注一号を使用	抗炎症作用		ループ利尿剤・チアジド系およびその類似降圧利尿剤(低カリウム血症)、甘草(偽アルドステロン症)	偽アルドステロン症(強度不明)、横紋筋融解症(グリチルリチン酸または甘草を含有する製剤)					偽アルドステロン症、ミオパシー、低カリウム血症(低カリウム血症、高血圧症等を悪化)	高齢者、妊婦小児等				長期適用により偽アルドステロン症		グリチルリチン酸として、通常成人1日1回40mgを皮下注射する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	薬疹

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果
	評価の視点	薬理作用	相互作用	併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ		
血管収縮成分	塩酸テトラヒドロソリン	ABCスプレー点鼻薬、塩酸塩がなく、硝酸塩を使用	直接局所粘膜に適用すれば粘膜炎の充血、腫脹を除去する。	モノアミン酸化酵素阻害剤(急激な血圧上昇)			頻度不明(傾眠、頭痛、めまい、振戦、不眠症、脱力感、血圧上昇、心悸亢進、不整脈、熱感、刺激痛、乾燥感、反応性充血、鼻漏、長期使用で反応性の低下等)	頻度不明(過敏症)			・本剤に対し過敏症の既往歴・2歳未満の幼児・乳児(全身症状)・モノアミン酸化酵素阻害剤を投与中(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことあるため、急性充血期に限って使用するか又は適切な休業期間をおいて使用すること。		適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことある。	本剤は原則として6歳以上の小児及び成人に用いる。通常、成人3～5時間毎に2～3回鼻腔内に噴霧するか、又は2～4滴を鼻腔内に点鼻する。なお、年齢、症状により適宜増減する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血	
	塩酸ナファゾリン	0.05%ブリドナ液「チバ」、塩酸ナファゾリンの配合剤しかなかったため、硝酸ナファゾリンの点鼻薬を用いた	血管平滑筋のα-アドレナリン受容体に直接作用して血管を収縮させる。アドレナリンより強い末梢血管収縮作用を有し、作用持続時間も長い(ウサギ耳殻血管)。	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)			・頻度不明(眼窩の鎮静作用(特に小児)、神経過敏、頭痛、めまい、不眠症、血圧上昇、悪心・嘔吐、熱感、刺激痛、乾燥感、嗅覚消失、反応性充血、長期投与で顆粒球減少・反応性の低下)	頻度不明(過敏症)		本剤の成分に対し過敏症の既往歴、2歳未満の乳・幼児(ショック)、MAO阻害剤の投与を受けている(急激な血圧上昇)	冠動脈疾患、高血圧症、甲状腺機能亢進症、糖尿病、交感神経作用薬による不眠・めまいなどの既往、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人、小児	適用又は頻回使用により反応性の低下や局所粘膜の二次充血を起すことあるため、急性充血期に限って使用するか又は適切な休業期間をおいて使用すること。		眼科用として使用しないこと。過量投与により、主な全身作用として、血圧上昇と二次作用として臓器虚血がみられる。幼・小児では過量投与により、顕著な鎮静があらわれ、発汗、徐脈、昏睡等の全身症状があらわれやすい。適用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	適用・頻回投与により顆粒球減少、反応性の低下、局所粘膜の二次充血を起すことがある。	通常、成人鼻腔内には、1回2～4滴を1日数回、咽頭・喉頭には1回1～2mLを1日数回塗布又は噴霧する。なお、年齢、症状により適宜増減する。局所麻酔剤1mLあたり0.05%液2～4滴の割合で添加する。	上気道の諸疾患の充血・うっ血、上気道粘膜の表面麻酔時における局所麻酔剤の効力持続時間の延長			
	塩酸フェニレフリン	ネオシネジロンコーワ5%点鼻薬、点鼻薬がなく点鼻薬を使用	塩酸フェニレフリンは選択的α1受容体刺激作用薬である。健康成人における散瞳は迅速であり、また、通常5～6時間で正常に復	MAO阻害薬(急激な血圧上昇)、三環系抗うつ薬(急激な血圧上昇)、シクロプロパン、ハロタンなどで全身麻酔する前には、本剤の投与を休止する			頻度不明(結膜炎、眼圧上昇、血圧上昇)自動車の運転等危険を伴う機械の操作には従事させない。	頻度不明(過敏症)		狭隅角や前房が浅いなどの眼圧上昇の要因(急性閉塞隅角緑内障の発作)	高血圧症、動脈硬化症、冠不全または心不全などの心臓疾患、糖尿病または甲状腺機能亢進症、小児、高齢者、妊婦又は妊娠している可能性のある婦人			長期にわたる散瞳は虹彩が癒着するという報告がある(点眼の注意)		通常1回、1～2滴宛点眼する。	診断または治療を目的とする散瞳			
抗ヒ	塩酸イプロヘプタン	なし																		

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 蓋用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)			H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	効能効果	
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)					スイッチ化等に伴う使用環境の変化
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの					使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ			
スタミ ン成分	マレイン酸クロロフェニ ロルフェニラ ミン	外用がない のでポラミ ン錠2mgを 使用	抗ヒスタミン 作用		中枢神経抑制剤・アルコー ル・MAO阻害剤・抗コリン作 用を有する薬剤(相互に作用 を増強)、ドロキドパ、ノル エピネフリン(血圧の異常上 昇)	痙攣・錯乱・ 再生不良性 貧血・無顆粒 球症(頻度不 明)	ショック(頻度 不明)	5%以上又は 頻度不明(鎮 静、神経過 敏、頭痛、焦 燥感、複視、 眠気、不眠、 めまい、耳 鳴、前庭障 害、多幸症、 情緒不安、ヒ ステリー、振 戦、神経炎、 協調異常、感 覚異常、霧 視、口渴、胸 やけ、食欲不振、 悪心、嘔		本剤の成分又は 類似化合物に対し 過敏症の既往歴、 横内臓(増悪)、前 立腺肥大等下部 尿路に閉塞性疾 患(増悪)、低出生 体重児・新生児(痙 攣等の重篤な反応 があらわれるおそれ)	眼内圧亢進、甲状 腺機能亢進症、狭 窄性消化性潰瘍、 幽門十二指腸通過 障害、循環器系疾 患、高血圧症、高 齢者、妊婦又は妊 娠している可能性 のある婦人						点鼻薬として、通常、成人に は1回2mgを1日1~4回経 口投与する。なお、年齢、 症状により適宜増減する。	じん麻疹、血 管運動性浮 腫、枯草熱、皮 膚疾患に伴う そう痒(湿疹・ 皮膚炎、皮膚 そう痒症、蕁 麻疹)、アレルギー性鼻炎、 血管運動性鼻 炎、感冒等上 気道炎に伴うく しゃみ・鼻汁・ め
抗ア レルギー 成分	クロモグリク 酸ナトリウム	インター ール 点鼻液	抗原抗体反 応に伴って起 こるマスト細胞からの化学 伝達物質(ヒ スタミン等)の 遊離を抑制す ることによっ てアレルギー 性鼻炎の発 現を防止す る。また、ヒ ト末梢静脈血 由来の炎症 性細胞(好酸 球、好中球、 単球)の活性 化に対して抑 制作用をも つ。				アナフィラキ シー様症状 (0.1%未満)	0.1~5%未満 (鼻内刺激 感)0.1%未満 (鼻出血、頭 痛)	0.1%未満(過 敏症)	本剤の成分に対し 過敏症の既往歴	妊婦又は妊娠して いる可能性のある 婦人			噴霧吸入させる こと。内服しても 効果は得られな い。		1日6回(起床時、日中約3 時間ごとに4回、就寝前)、 1回各鼻孔に1噴霧(クロモ グリク酸ナトリウムとして 2.6mg)ずつ噴霧吸入する。 症状の緩解が得られれ ば、その後の経過を観察 しながら減量すること。	アレルギー性 鼻炎	

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用		B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		D 濫用のおそれ		E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)		F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)		H スイッチ化等に伴う使用環境の変化		用法用量	効能効果		
	評価の視点	薬理作用	相互作用		重篤な副作用のおそれ		重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ		薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の再発・悪化のおそれ)		症状の悪化につながるおそれ		使用対象の 症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)		使用方法(誤使用のおそれ)				スイッチ化等に伴う使用環境の変化	
			併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの							使用量に上限があるもの	過量使用・誤使用のおそれ	長期使用による健康被害のおそれ					
殺菌成分	塩化ベンザルコニウム	0.1w/v%チアミトール水	本剤は使用濃度において、栄養型細菌(グラム陽性菌、グラム陰性菌)、真菌等には有効であるが、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない。イオン界面活性剤であるので、表面張力を低下させ、清浄作用、乳化作用等を示す。作用機序は、陰電荷を帯びる細菌に陽電荷を帯びる塩化ベンザルコニウムが菌体表面に吸着・乗積され、菌体たん白を変性させ殺菌作用をあらわす。					頻度不明(過敏症)				粘膜、創傷面または炎症部位に長期間または広範囲に使用しないこと				・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する(刺激性がある)。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。また、使用後は滅菌精製水で水洗する。・深い創傷または眼に使用する希釈水溶液は、調製後滅菌処理すること。・経口投与しないこと。・洗腸には使用しないこと。・密封包帯、ギプス包帯、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。				効能・効果:用法・用量(塩化ベンザルコニウム濃度)①手指・皮膚の消毒 通常石けんで十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い落とし、塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で清拭する。術前の手洗の場合には、5~10分間ブラッシングする。②手術部位(手術野)の皮膚の消毒:手術前局所皮膚面を塩化ベンザルコニウム0.1%溶液で約5分間洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.2%溶液を塗布する。③手術部位(手術野)の粘膜の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.025%溶液を用いる。④感染皮膚面の消毒:塩化ベンザルコニウム0.01%溶液を用いる。⑤医療用具の消毒:塩化ベンザルコニウム0.1%溶液に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際は、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンザルコニウム0.1%溶液中で15分間煮沸する。⑥手術室・病室・家具・器具・物品などの消毒:塩化ベンザルコニウム0.05~0.1%溶液を布片で塗布・清拭するか、または噴霧する。⑦履洗浄:塩化ベンザルコニウム0.02~0.05%溶液を用いる。⑧結膜囊の洗浄・消毒:塩化ベンザルコニウム0.01~0.05%溶液を用いる。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用:正常の部位への使用より低濃度とすることが望ましい。		

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用	C 重篤な副作用のおそれ	C' 重篤ではないが、注意 すべき副作用のおそれ	D 濫用のお それ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化 につながるおそれ)	G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ 化等に伴う 使用環境の 変化	用法用量	効能効果	
評価の視点	薬理作用	相互作用	重篤な副作用のおそれ	重篤ではないが、注意すべ き副作用のおそれ	薬理に基づく 習慣性	適応禁忌	慎重投与 (投与により障害の 再発・悪化のおそ れ)	症状の悪化 につながるお それ	適応対象の 症状の判別 に注意を要 する(適応を 誤るおそれ)	使用方法(誤使用のおそれ)	スイッチ化 等に伴う使 用環境の変 化	
		併用禁忌(他 剤との併用 により重大な 問題が発生す るおそれ)	併用注意	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの	薬理・毒性に 基づくもの	特異体質・ア レルギー等 によるもの		使用量に上 限があるもの	過量使用・誤使 用のおそれ	長期使用に よる健康被 害のおそれ	
殺菌成分	塩化ベンゼ ニウム	ハイアミン 液、塩化ベ ンゼトニウム 10w/v%	芽胞のない細菌、真菌類に広く抗菌性を有し、グラム陽性菌には陰性菌よりも低濃度で効果を示す。一方、結核菌及び大部分のウイルスに対する殺菌効果は期待できない				頻度不明(過敏症)			・原液は皮膚・粘膜に付着及び眼に入らないように注意する。・炎症または易刺激性の部位(粘膜、陰股部等)への使用時は低濃度・経口投与しないこと。・密封包装、ギプス包装、パックに使用すると刺激症状があらわれることがあるので、使用しないことが望ましい。・深い創傷又は眼にしようする場合は希釈液は注射用蒸留水か滅菌精製水を使用		①通常石けんでき十分に洗浄し、水で石けん分を十分に洗い流した後、塩化ベンゼトニウム0.05～0.1%溶液(本剤の100～200倍希釈液)に浸して洗い、滅菌ガーゼあるいは布片で拭拭する。術前の手洗の場合には、5～10分間ブラッシングする②手術前局所皮膚面を、塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)で約5分間洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.2%溶液(本剤の50倍希釈液)を塗布する③塩化ベンゼトニウム0.01～0.025%溶液(本剤の400～1,000倍希釈液)を用いる④塩化ベンゼトニウム0.01%溶液(本剤の1,000倍希釈液)を用いる⑤塩化ベンゼトニウム0.025%溶液(本剤の400倍希釈液)を用いる⑥塩化ベンゼトニウム0.02%溶液(本剤の500倍希釈液)を用いる⑦塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)に10分間浸漬するか、または厳密に消毒する際には、器具を予め2%炭酸ナトリウム水溶液で洗い、その後塩化ベンゼトニウム0.1%溶液(本剤の100倍希釈液)中で15分間煮沸する⑧塩化ベンゼトニウム0.05～0.2%溶液(本剤の50～200倍希釈液)を布片で塗布・拭拭するか、または噴

鼻炎用点鼻薬

製品群No. 70

ワークシートNo.43

リスクの程度 の評価	A 薬理作用	B 相互作用		C 重篤な副作用のおそれ		C' 重篤ではないが、注意すべき副作用のおそれ	D 濫用のおそれ	E 患者背景(既往歴、治療状況等) (重篤な副作用につながるおそれ)	F 効能・効果(症状の悪化につながるおそれ)		G 使用方法(誤使用のおそれ)	H スイッチ化等に伴う使用環境の変化	用法用量	機能効果
		併用禁忌(他剤との併用により重大な問題が発生するおそれ)	併用注意	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理・毒性に基づくもの	特異体質・アレルギー等によるもの	薬理に基づく習慣性	適応禁忌	慎重投与(投与により障害の再発・悪化のおそれ)	症状の悪化につながるおそれ	適応対象の症状の判別に注意を要する(適応を誤るおそれ)		
抗炎症成分	グリチルリチン酸二カリウム	抗アレルギー作用、角膜上皮再生促進作用を有する											通常、1回2～3滴を1日5～6回点眼する。なお、症状により適宜増減する。	アレルギー性結膜炎